

タイトル：2025年度 教育セミナー（第21回）

日時：2025年9月18日（木）～21日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3階 大会議室（303）

「ティムール朝サマルカンドの天文学研究：為政者と科学者の関係性に注目して」

橋本藍（東京大学総合文化研究科）

初めて参加した中東☆イスラーム教育セミナーは、同世代との交流や経験豊かな先生方による講義、そして大学院生の研究報告に対するクリティカルな質問と温かい助言に満ち、かつてなく濃密な4日間だった。今回の私の発表は、学部の卒業論文を総括すると同時に修論への道筋を模索するものだったが、先生方からの指摘や大学院生同士での会話の中で、自分の研究の問題点や課題が次々に浮き彫りになり、今後取り組むべき方向性が見えてきた。特に印象的だった点について2点述べたい。

第一に、視野を広げる必要性を痛感した。参加者は中東やイスラームに関わる研究をしているという点で共通点があっても、専門はそれぞれ全く異なり、それぞれの視点から発表やコメントが行われる。さまざまな地域や時代、ディシプリンでの研究発表から多くを学び取ることができた。また、私の研究発表に対しても、質疑応答の時間を超えて異なる視点からの貴重なコメントが多く寄せられた。たとえば、私が研究しているティムール朝のウルグ・ベグは現代ウズベキスタンのナショナリズムの文脈で

極めて重要な存在であるため、中央アジア研究を専門とされる方々からは、欧米やトルコの先行研究だけでなく、ソ連期の研究蓄積や現代のウズベキスタンのナショナル・ヒストリーを把握するように助言を受けた。ロシア語やウズベク語の文献の重要性を理解しているつもりにはなっているけれども、実際には手が回っていない状態であり、指摘を受けて改めて誠実に広い視野をもって研究に取り組まねばならないと気を引き締めた。

第二に、研究の現状を見直し、今後の研究手法を再考する機会になった。研究発表では、現時点での研究の進行状況を整理して今後の展望を示し、情報を取捨選択しつつもわかりやすく説明する必要がある。その作業の中で露わになった壁は、ティムール朝時代の残存史料や研究蓄積の厚さから、私の研究は既存研究の内容をなぞるだけになる恐れがあるということだった。この点について同じ前近代ペルシア語史料を用いる先生方に、研究史料を追加するだけでなく、アプローチの変更や研究対象範囲の拡大といった抜本的な方法論の見直しが必要になることを指摘していただいた。具体的な助言やヒントとなる先行研究の紹介にも恵まれ、問題点を解決して取り組むための指針となったことを確信している。今回のセミナーへの参加を糧にこれからも精進していきたい。

最後にはなりますが、このような実りある会を開催して下さった AA 研の先生方とスタッフの方々に、篤く御礼申し上げます。